慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	集団実施のBaum Testにみる学生気質：第2報S63年度新入生の特徴
Sub Title	A quantitative analysis of baum test in the Kyoritsu College of Pharmacy Part 2
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1988
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.33 (1988.) ,p.9- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000033-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Ann, Rept. Kyoritsu
Coll. Phrm.

集団実施の Baum Test にみる学生気質

——第2報　S63年度新入生の特徴——

小川　芳子

A Quantitative Analysis of Baum Test in the Kyoritsu College of Pharmacy　Part 2

Yoshiko OGAWA

I have analyzed the contents of 2064 sheets of Baum Test which were pictured by freshmen in 10 years, 1979～88.

As I examined the results, comparing the average of rate in each item for the years with 1988's, there are following characteristics.

1. Both tree types and ends of tranks have few radial types.
   This clarifies that many examinees can't find the direction toward future.
2. There are a few expressions of a cubic sense, clear leaves and falling seeds or leaves. There are many examinees who don't want to express themselves.
3. Those trees have few roots. It suggests many examinees have never deeply thought themselves before.

はじめに：

本学の学生相談室では，毎年新入生に樹木画テスト（Baum Test）と YG テストを実施している。9年間の結果について第1報で報告した。

今回は，10年分を1つの区切りと考え全データを合計し数値化したものと S63年度の新入生の特徴とを比較検討する。

第1報で報告した通り9年という時間軸にそって検討したが，Baum Test の独自性，信憑性の高さから時間軸上での変化を読むことには無理があったが，10年分というデータの集積の中で2064枚の画を1つの単位と考え，1学年分の画とを比較すると，いくつかの特徴が見られたのでここに報告する。

1. S63年度結果と10年分 Total 結果との比較

樹木画 Baum Test の整理方法は第1報[1)]と同様京大方式による。このテストを S53年から実施してきたが，初年度は用紙の不統一・指示の不徹底など，それ以降と条件の統一に関して不備が見られるので除外，S54年から S63年までを，Total として実数と構成比を％で表す。S63年と Total 間の有意差がどの程度であるかを，x^2 検定を用い検定し，これらを表にしたのが Table 1 である。

Table. 1

整理リスト		昭和63年度		Total		X^2 検定値	構成比の差
Ⓐ基本的なもの	1. 実	198	92.1%	1864	90.3%	0.72	
	2. 葉	70	32.6%	869	42.1%	7.32**	(9.5%)
	3. 花	3	1.4%	33	1.6%	0.05	
	4. 枝	154	71.6%	1585	76.8%	2.87	
	5. 根	76	35.3%	870	42.2%	3.71	(6.9%)
	6. 地平線	59	27.4%	738	35.8%	5.92*	(8.4%)
	7. 背景	31	14.4%	347	16.8%	0.81	
	8. 文字	14	6.5%	178	8.6%	1.13	
	9. 線描樹冠	154	71.6%	1355	65.6%	3.11	(6%)
	10. 冠中果	109	50.7%	955	46.3%	1.53	
	11. 落ちる実，葉	8	3.7%	156	7.6%	4.29*	(4.1%)
	12. 裸木	0	0.0%	3	0.1%	0.18	
	13. 周辺佇立	0	0.0%	11	0.5%	0.31	
	14. 戯画的	1	0.5%	37	1.8%	2.09	
	15. 実の強調	15	7.0%	218	10.6%	2.73	
	16. はみ出し	26	12.1%	305	14.8%	1.13	
	17. 立体感	5	2.3%	277	13.4%	22.11***	(11.1%)
Ⓑ 幹	18. 2本以上	2	0.9%	34	1.6%	0.64	
	19. 斜	1	0.5%	26	1.3%	1.05	
	20. 曲	1	0.5%	21	1.0%	0.18	
	21. 模様	77	35.8%	922	44.7%	6.20*	(8.9%)
	22. 傷	15	7.0%	191	9.3%	1.23	
	23. 電柱的	5	2.3%	40	1.9%	0.15	
Ⓒ 枝	24. 三次元	0	0.0%	36	1.7%	2.77	
	25. 一線枝	20	9.3%	166	8.0%	0.41	
	26. たれ下り	8	3.7%	76	3.7%	8.2E-04	
Ⓓ樹 型	27. 基本	105	48.8%	993	48.1%	0.04	
	28. 冠	54	25.1%	432	20.9%	2.03	(4.2%)
	29. 放散	37	17.2%	495	24.0%	4.99**	(6.8%)
	30. ヤシ	11	5.1%	70	3.4%	1.69	
	31. エダのみ	3	1.4%	28	1.4%	2.2E-03	
	32. その他	3	1.4%	45	2.2%	0.58	
Ⓔ幹 端	33. 開放	52	24.2%	384	18.6%	3.92*	(5.6%)
	34. 鋭閉	4	1.9%	50	2.4%	0.27	
	35. ツキヌケ	4	1.9%	66	3.2%	1.17	
	36. 放散	101	47.0%	1161	56.3%	6.78**	(9.3%)
	37. 直閉	3	1.4%	13	0.6%	1.64	
	38. ものかげ	45	20.9%	326	15.8%	3.76	(5.1%)
	39. その他	6	2.8%	59	2.9%	3.2E-03	
Ⓕ位置(中心点)	40. a	0	0.0%	3	0.1%	0.18	
	41. b	17	7.9%	114	5.5%	2.04	
	42. d	5	2.3%	41	2.0%	0.11	

整理リスト		昭和63年度		Total		X^2 検定値	構成比の差
	43. e	183	85.1%	1763	85.4%	0.01	
	44. f	4.5	2.1%	18.5	0.9%	2.79	
	45. g	0.3	0.1%	4.3	0.2%	0.04	
	46. h	0.3	0.1%	47.3	2.3%	4.41*	(2.2%)
Ⓖ 葉	47. 葉のみ	39	18.1%	516	25.0%	4.97*	(6.9%)
	48. 線描樹冠のみ	129	60.0%	1056	51.2%	6.09*	(8.8%)
	49. 葉と線描	29	13.5%	285	13.8%	0.02	
	50. 何もない	14	6.5%	121	5.9%	0.14	
Ⓗ利用点	a	204	94.9%	1935	93.8%	0.43	
	b	207	96.3%	2000	96.9%	0.24	
	c	201	93.5%	1882	91.2%	1.32	
	d	206	95.8%	2011	97.4%	1.93	
	e	215	100.0%	2061	99.9%	0.18	
	f	200	93.0%	1926	93.3%	0.03	
	g	161	74.9%	1587	76.9%	0.44	
	h	199	92.6%	1940	94.0%	0.69	
	i	133	61.9%	1358	65.8%	1.33	
Number		215		2064			

*：$p<0.05$, **：$p<0.01$, ***：$p<0.001$

構成比間の差と検定値の大小は必ずしも一致しない。これは，実数の違いから生じる差で，構成比の大小だけでは論じるべきではない。しかし構成比は簡単に算出できるという手軽さもあり目安としては有効な対比方であり，構成比に10％の相違があれば有意さもかなり高いといえる。

Table 1 から Total と S 63 年度とを比較，有意差の高い順に選び出すと次のような特徴が見られた。(　) 内の番号は整理リスト番号

① 立体感（17）を描写するものが非常に少ない。

② 葉（2）を明瞭に描くものは少ない。線描樹冠（9）を描くものは多少多い。葉のみ（47）が少なく，線描樹冠のみ（48）が多い。葉と線描樹冠両者を描くものは例年並みであった。

③ 樹型，幹端ともに放散が少ない（29）（36）。枝そのものも少ない（4）。樹型で少なかった部分は冠型（28），ヤシ型（30）の増加で表された。幹端は開放（33），ものかげ（38）が多い。

④ 地平線（6）を描くものが少ない。

⑤ 落ちる実，葉（11）を描くのが少ない。

⑥ 幹の模様（21）が少ない。傷（22）も少ない。電柱的幹（23）は多くなっている。

⑦ 根（5）が有意差としては顕著ではないが少ない。又，描かれていてもわずかであったり，線が全体に薄かったりする。

⑧ 第1報の通り全体の利用空間が初年度から確実に増加傾向が見られたが，S 61 年度を頂点として S 62，63 年度は下降傾向を示した。

Total と S 63 年の数値とを比較すると以上の 8 点につき特徴が見られたが，これは 10 年間に徐々にそうなっていったのか，それとも本年度だけの特徴なのだろうか。①～⑦について，構成

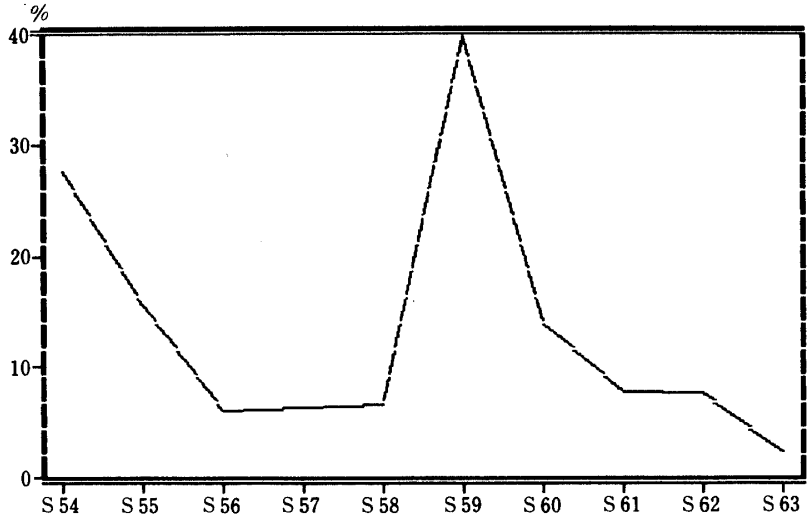
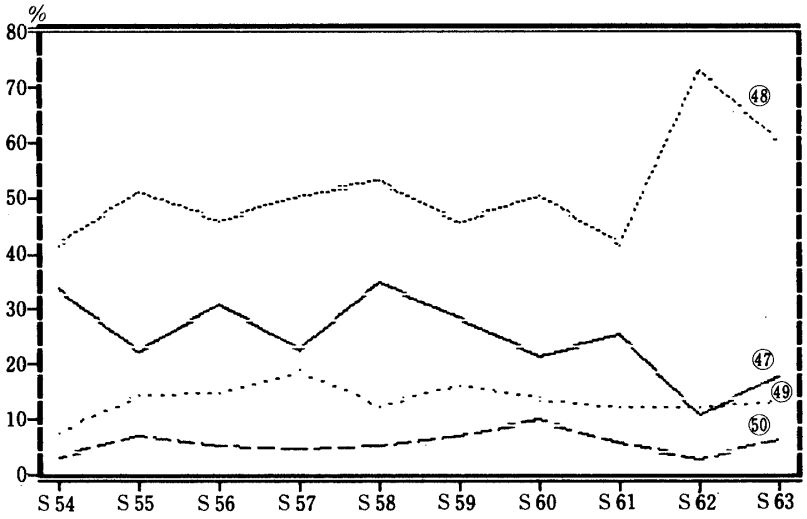
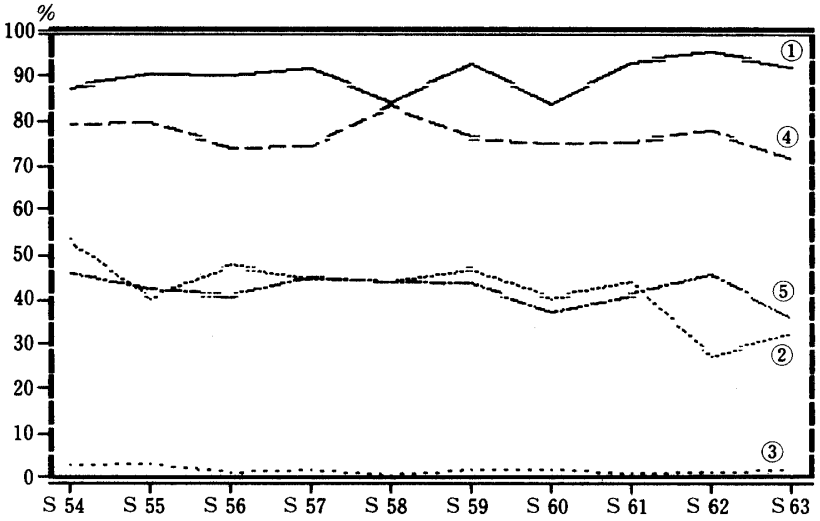


Fig. 1　立体感



—47. 葉のみ
····48. 線描樹冠のみ
···49. 葉も線描樹冠もある
- -50. 葉も樹冠もなし

Fig. 2　葉に関するもの



—1. 実
····2. 葉
···3. 花
- -4. 枝
-·-5. 根

Fig. 3　基本的なもの

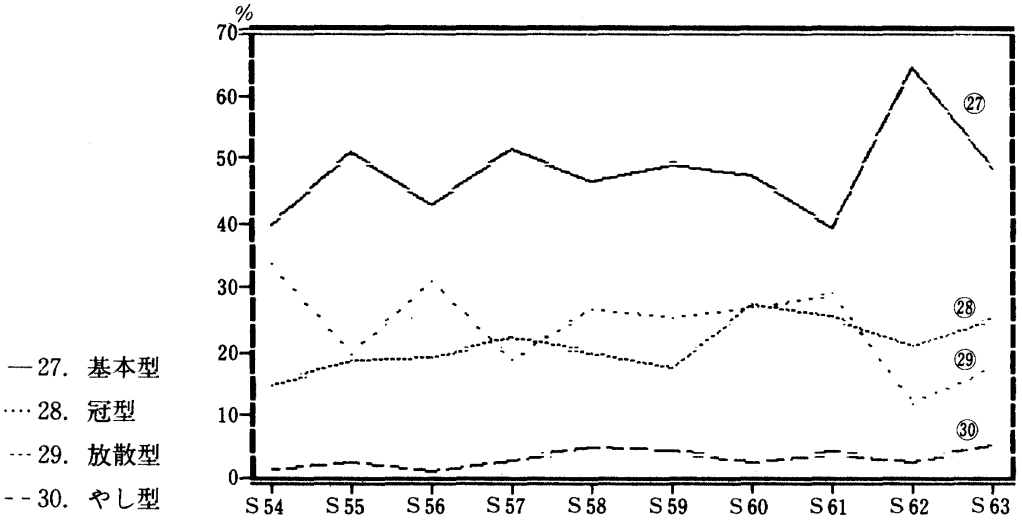


Fig. 4 樹型

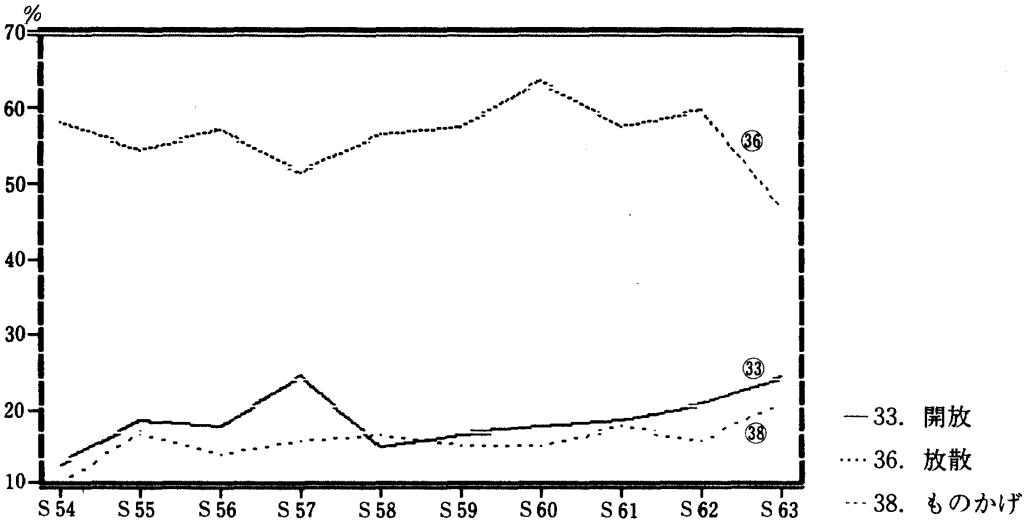


Fig. 5 幹端

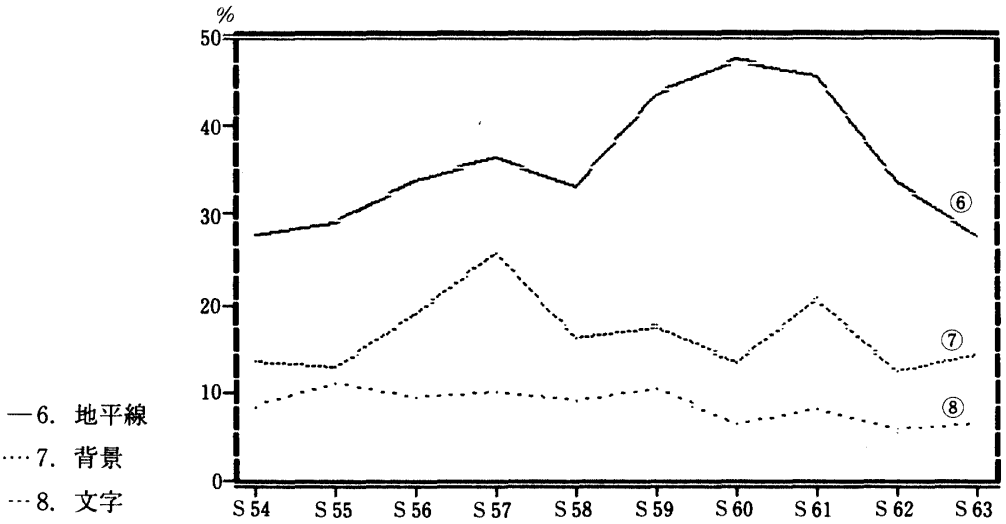


Fig. 6

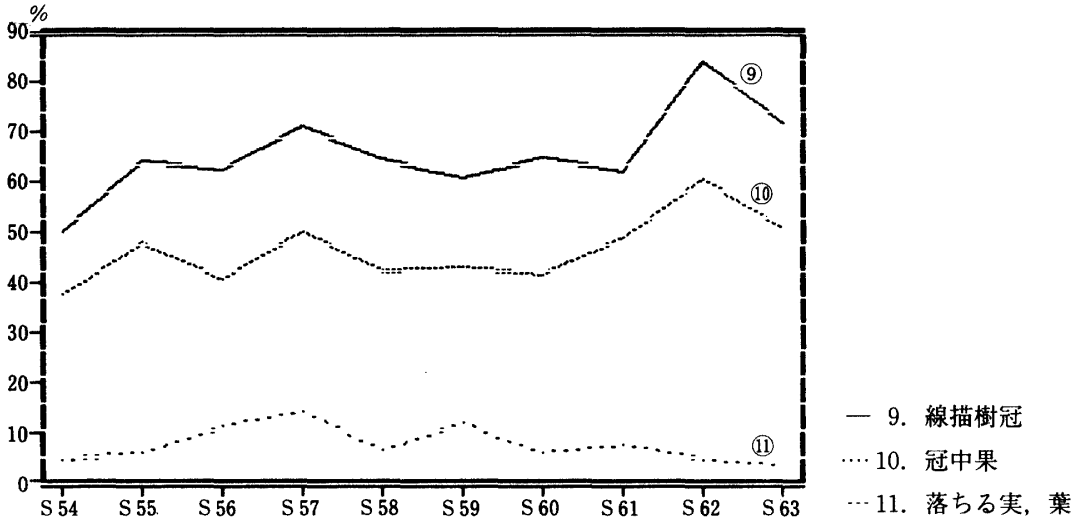


Fig. 7

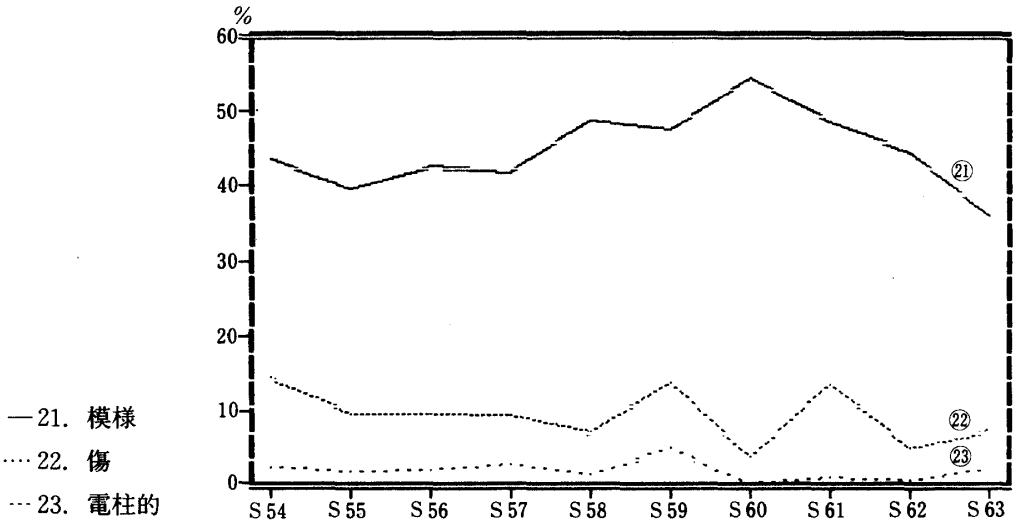


Fig. 8　幹

比を図にして動向を見てみたのが，図 Fig 1 ～ Fig 8 である。

2. S 63 年度新入生の社会的背景

S 63 年度の 1 年生は， S 43, 44 年の出生者が殆どである。この時代は大学紛争の華やかなりし頃であり，出生率は，丙午年の後ということもあり上昇カーブ上にある世代である。

彼らの成長してきた年代には，石油ショックなど経済の低成長期もあり，経済が低成長でも進学率は逆に上昇し，S 45 年にはすでに高校進学率は 90 % を越え，大学進学率をどんどんあげている世代である。一元化した方向性を持つ社会，学業第一と思われる社会にあってはそこに乗れない，のり損ねてしまう集団が必ず存在し年齢的な要素から，その一団は非行化という行動を取った。丁度彼らが中学時代を過ごすころに戦後の青少年非行第 3 のピークが訪れた。

大学入学というある意味では，輝かしい現在を迎えるまでには，一元化したレールの上から振り落とされないために多大の努力をし現在に至っている人も少なくないはずである。特に本学は，

理系の大学として親世代には快く受け入れられている。親の希望で入学を決めたという学生も少なくない。自分自身の希望より他からの要求が多大の場合に意識化されない努力目標が，本人の性格となり表現されることも考えられる。

このような社会状況を裏づけるかのようにBaum Testに描かれた樹木画に見られる前項8つの特徴は次のように意味づけられる。

3. 未来が見えない

樹型，幹端ともに放散型に描く人が少ない。放散型と定義づけられるのは，幹の部分から枝が出る画を描いている型のことである。幹という自分自身の本幹から，細分化させ，現在の姿あるいは将来について枝という形で表現をするのである。

樹型について，放散型の少ない部分は冠型とヤシ型の増加で補われている。冠型は，幹の途中から線描樹冠によって全体を覆い隠して中身を見せない，見せたくないという意志表示でもある。他から干渉されたくないのであろう。葉も線描樹冠も両者を描いている場合は，自他の境界はしっかり保つが，自分自身をしっかり持って自己表現ができる，自他との距離を上手に保てる人と解釈できるが，Fig 2からわかるように，葉も線描樹冠もある（49）群はさしたる増減なく，線描樹冠のみ（48）が最近の傾向として増えているのである。これは自分自身を見せたくない見たくないという表現であり，明示できるものが育っていないとも考えられる。

一方，ヤシ型という表現であるが，ヤシ型[1]は『①理性や未来よりも現在の気分に動かされやすく，感情に訴える説得に支配されやすい。②現実からの逃避。③孤立と孤高を表す。』と述べられている通り，冠型への表現と同傾向が読み取れる。

次に，幹端も放散が少なかったが，この少ない部分は開放，ものかげの増加で表現されている。開放は，幹を空洞として中を見せているのに対し，ものかげは葉などで幹の中を見せない工夫をしているわけであるから，開放状態より分化しているといえるかもしれない。しかし，壁にぶつかって先に進めない状況も想定できる。どちらも未来に対する，あるいは現況に対しても把握がうまくなされていない一群とみなすことが出来る。

放散型ではあるが，枝が，一線枝で描かれたものが増加傾向にある。これも前述と同様描かないよりは分化しているが，線に厚み奥行きがないことは実体が伴なわないことである。

4. 自己表現しない

葉を明瞭に描くものが少ない。地平線，落ちる実や葉，幹の模様，立体感の描写が少ない。

これらは全て自己をすぐに表現させない，エゴを入れた表現を極力避ける傾向が随所に見られることである。

立体感については，第1の有意差ありとデータで知らされたが，Fig 1で年毎の構成比を見るとS 63年が少ないことは確かであるが，S 59年が以上に高いことがわかる。立体感の判定は主観の入る判定項目である。実の有無といった一目瞭然の項目と違うのである。S 59年の描画を整理したのは2学年目だったと記憶しているが，判定基準の慣れはまだ出来上がっていない頃である，再度の見直しが必然である。見直すことで平均値が10％以下になる可能性が高い。修正後は，葉や地平線の有意差と同程度と見て差しつかえなかろう。

構成比のグラフFig 3から実を描くものは増加傾向にあるが，葉は減少傾向にあるのがわかる。

『実のなる木を描いて下さい』という指示で描かれる樹木画，実という指示を受けたことに答えなければいけないという機制が働く。指示どおりに行動することが多い集団であるが，それがさらに増加していることである。これに対して，葉でも花でも枝でも特に指示されていないことを表現することは極力避ける。余分なことはしないという姿勢である。

地平線，葉ちる実・葉，幹の模様，傷などはS 60年以降はかなり下降減少が見られるが，自己表現を極力避ける傾向が多くなってきているのは，ここ数年の傾向のようである。逆に幹の電柱的が多くなっているのは，幹にも感情を付加しないことを現わしていることである。

5. 根と過去

数字に現われた数値としては有意差が顕著であるとはいえないが，全体を整理している間に，何か今年は根が少ないのではといった会話が交わされた。有意差は顕著でなくても構成比では7％という相違が見られた。又描かれていると判定されたものでもその内容は貧弱であった。1～2本の線であっても根と判定したのである。同様に，数値化されないが筆圧が薄いものが多いという印象も受けていた。これまでの整理表からは筆圧まで数量化することは不可能で，立体感について主観によるところが多いと述べたが，それ以上に主観の加わる判定にならざるをえないのである。

根について『樹木画テスト』の記述によると[1]『①大地に示される現実との接触の仕方，②過去・家族・社会に根づく自我の安定性の程度，③無意識の欲求や精神エネルギーの強さと受容度などを表す』となるが，過去に関する表現がどうなされるかの大きな指標となる。

前述したように自己表現はなるべく避けるという行動様式の増加は，過去についても表現したくない，考えたくないことであり，これまでの育ちの中でも自己について意識化した経験を持たないことである。

根を描いている35.3％の画も内容が貧弱なものが多い。全体的筆圧の弱さとあいまって，これまでに自己を直視した経験の少なさは，今後の生活において人生が順調に進行している場合には表面化されることはないが，精神エネルギーの弱さを感じる。

現在までは大学入学という一応自他ともに認められたレールの上を歩んでいる人々が多いので，これまでの生活様式を続けて順調に生活を続けていくかもしれないが，ここも又競争社会の一角である。競争に破れた時自己の存在感をどう位置づけるか，精神エネルギーの弱さが一気に病態化してしまうことも考えられる。

これは上級学年の学生には，ボツボツ現われ始めている現象であり今後のBaum Testを見る際の指標として以上3点の特徴を現す描画には注意してみることが，臨床的意味からも必要なことである。

まとめ：

S 54～S 63年度の10年間に新入生が描いたBaum Test 2064枚を整理した。整理の方法は第1報に述べた通りである。全体の示す傾向をTotalとして構成比を算出しS 63年度の描画と比較検討した。その結果8点の相違が見られたが，作用機序から次の3点の特徴が顕著であった。

① 樹型・幹端ともに放散型を描いたものが少なかった。これは将来に対しての方向性が明示出来ないものが増加していることである。

② 立体感の表現が少ない。明確な葉，落ちる葉・実，地平線，幹の模様・傷が少ない。これらは自己表現を極力避けるためである。これと反対に実の描写が多かったがこれは自己表現ではなく他からの指示に素直に従う。同一目標からはずれないための努力の顕れである。

③ 根が少なかった。これは過去にも自己について意識化したことがないためであり，精神的エネルギーの低さ，逆境になった時の精神的脆さが感じられる。

引用文献

1. 高橋雅春・依子 「樹木画テスト」 文教書院 (1986) P50, 78

参考文献

1) 小川芳子他 「集団実施のバウムテストに見る学生気質」——第1報 共立薬科大学研究年報 No. 31 (1986)

2) 岡宏子他 「親子関係の理論」②家族と社会 岩崎学術出版 (1986年)